

柏原市遺跡群発掘調査概報

1995年度



1996年3月

柏原市教育委員会

序 文

1995年1月17日早朝の兵庫県南部地震は、6000を越える人の命を奪い、また残された人々の平穏な生活や物事に対する価値観、人生観までも一瞬にして変えてしまいました。1年と数カ月が経った今、物心両面での堅実かつ迅速な復興を願うものであります。

そうした中、数々の分野でこの震災を教訓に、災害に対する新たな取り組みもあります。考古学の分野では、遺跡調査で確認される噴砂現象や断層の研究、検証が最たるものと言えるでしょう。大地の活動の記録を読みとり、その周期を探ることに、考古学の手法が用いられるのは今になって始まったことではなく、以前から研究の対象となっていましたが、広く一般に知られていたものではありませんでした。そして今、取り返しのつかない不幸な出来事の中で、単に古代のロマンを探るものとの理解だけであった考古学に新たな使命が与えされました。それは過去の情報を未来に生かすという、私たちがめざしている実学としての考古学の方向性を再認識することになりました。

末筆ではありますが、調査に際しご協力、ご理解を賜りました関係各位に感謝申し上げます。

1996年3月

柏原市教育委員会
教育長 崩刀和秀

例　言

1.本書は柏原市教育委員会が1995年度に原因者負担事業として実施した、平尾山（ひらおやま）古墳群95-2次、同95-7次、太平寺（たいへいじ）遺跡95-1次、安堂（あんどう）遺跡95-1次の発掘調査概報です。

2.発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史、石田成年が担当しました。

3.調査及び報告書作成に際し、次記の諸氏の参加、協力がありました。（順不同・敬称略）

奥野　清	谷口鉄治	分才隆司	長田　勲	石橋智成	西島伸彦
百合藤厚子	松倉宏憲	今村和子	阪口文子	横原美智子	藤戸康代
有江マスミ	乃一敏恵	村口ゆき子	松本和子	山本允子	

4.調査に際し、関係各位には格別のご配慮を賜りました。記して謝意を表します。（順不同）

奈良県生駒郡三郷町	関西電力株式会社	丸紅株式会社	安男三治氏	安尾勝治氏
村本建設株式会社	株式会社島田組			

5.本書図中の方位は磁北を指し、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としました。

6.本書で用いた色調の表現は『新版標準土色帖』（12版 1992）によるものです。

目　次

序　文	
例　言	
日　次	
第1章 平尾山古墳群	2
第2章 太平寺遺跡	11
第3章 安堂遺跡	16
報告書抄録	

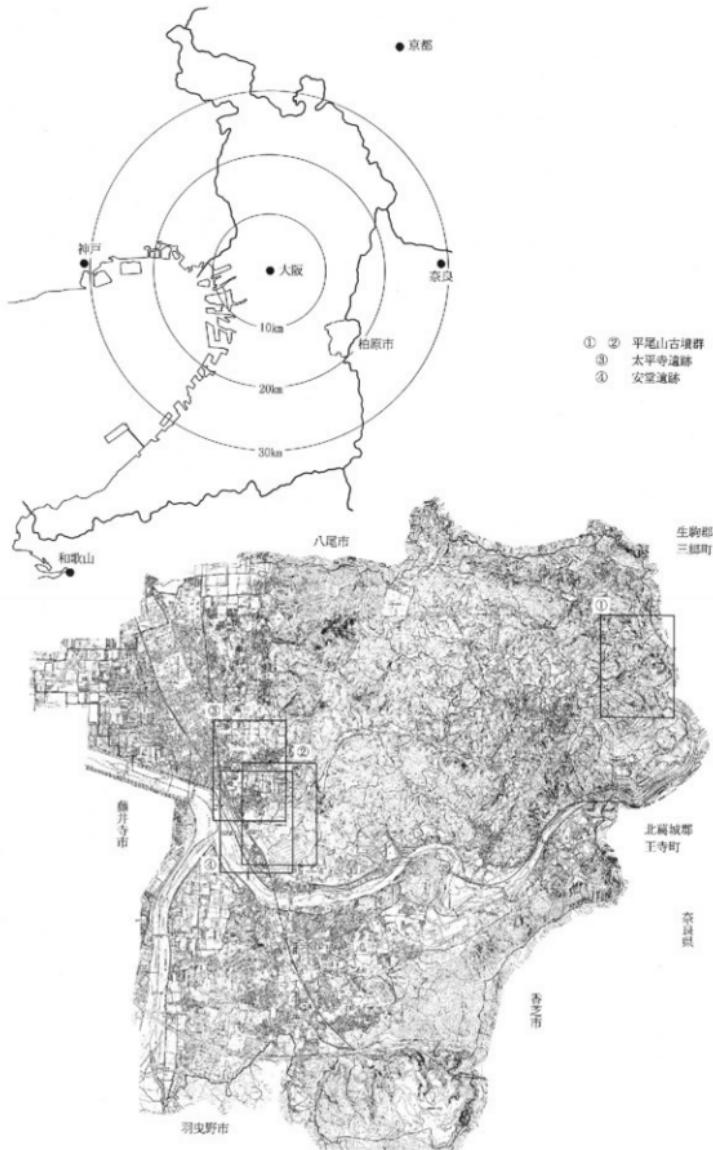


図1 柏原市位置図

第1章 平尾山古墳群

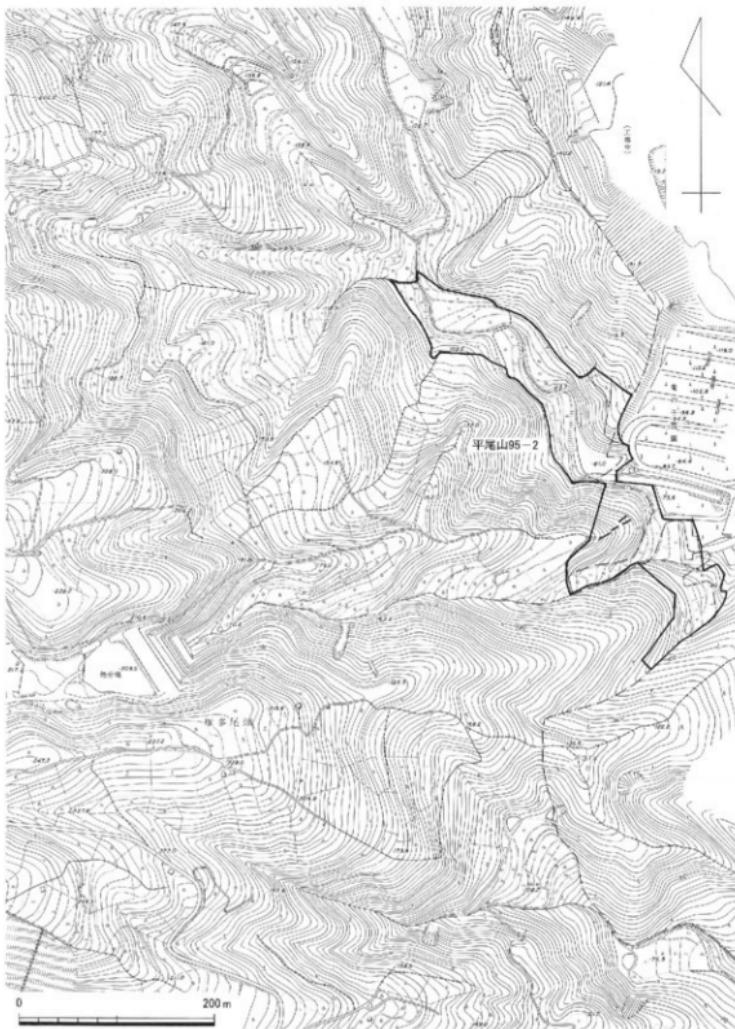


図2 調査対象地位置図(1) (S=1/5000)

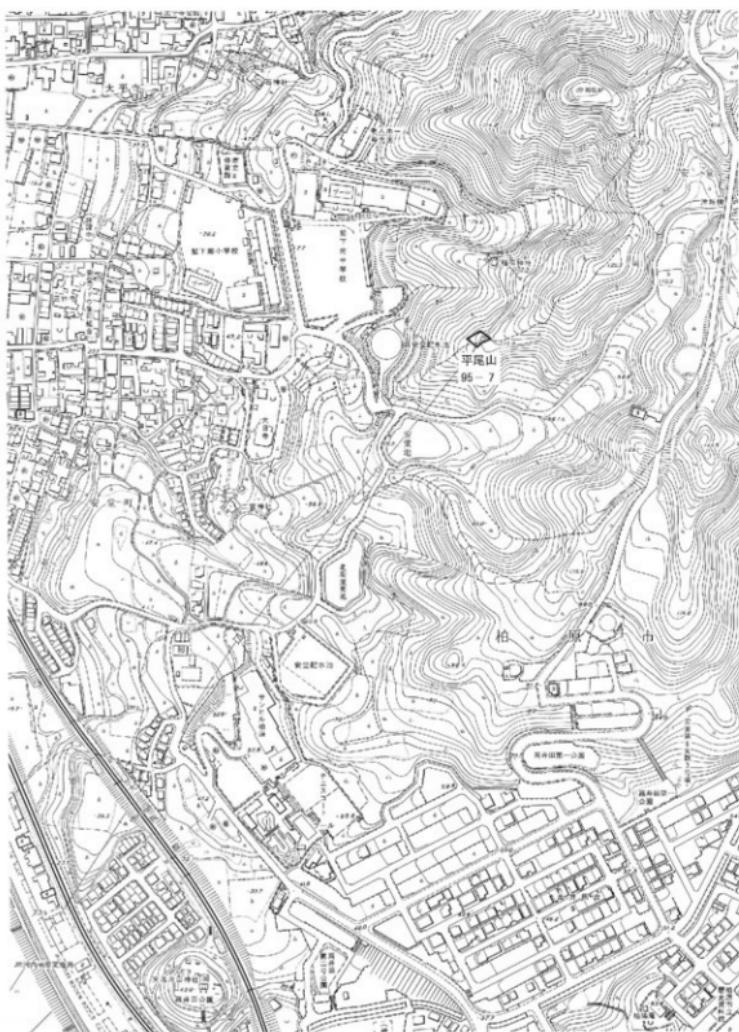


図3 調査対象地位置図(2) ($S = 1/5000$)

95-2次調査

- ・調査対象地 柏原市雁多尾畠665外27筆
- ・分布調査 1995年2月15日～2月23日（調査担当者 石田成年）
- ・発掘調査 1995年5月16日～5月29日（調査担当者 安村俊史）
- ・対象面積 29517.02m²

この調査は三郷町（町長 中井弘己）の依頼と負担による、墓地拡張工事に伴う事前の分布調査及び発掘調査です。奈良県生駒郡三郷町にある墓地を府県境を越えて柏原市域に拡張する工事が計画されたため、協議を進め、まず工事予定地内に古墳やその他の遺跡がないかどうかを踏査して確認する分布調査を実施しました。分布調査は対象地内の尾根筋を重点的に実施し、草の生い茂っているところでは草刈りをしてから踏査に入りました。その結果、遺跡・遺物は全く発見されませんでしたが、対象地中央の東向きの尾根に、大きな石など数個の石が露出していることが確認されました。そこで、この尾根筋について、古墳がないかどうかを確認するための調査を実施しました。

調査は幅1mの細長い調査区4箇所で実施しました。これは、小さい面積を発掘することによって、遺跡があるかないかを確認するための調査で、試掘調査あるいは確認調査と呼ばれています。試掘調査は本格的な発掘調査に先立って実施されるもので、この調査結果によって、どのような発掘調査が必要かを判断するための予備的な調査です。そして、このような試掘調査に伴う小規模な調査区を一般にトレンチ（試掘坑）と呼んでいます。各トレンチの調査結果は後に述べることとし、結論を先に述べると、今回の調査では遺構・遺物は全く発見されませんでした。古墳の石室に使用されているものではないかと思われた石も、自然の石であることが確認できました。そのため、全面的な発掘調査を実施する必要がないと判断し、この試掘調査だけで調査を終了しました。

私たち調査を実施する者は、自分たちの調査した遺跡が工事によってつぶされてしまうことが概念でなりません。ですから、今回のように遺跡がないことが確認されるとホッとなります。それでは、調査内容について、もう少しく述べることにしましょう。

第1トレンチは、尾根筋の最も高い位置にあるトレンチで、標高113m～117mの高さがあります。



写真1 調査区遠景



写真2 調査状況

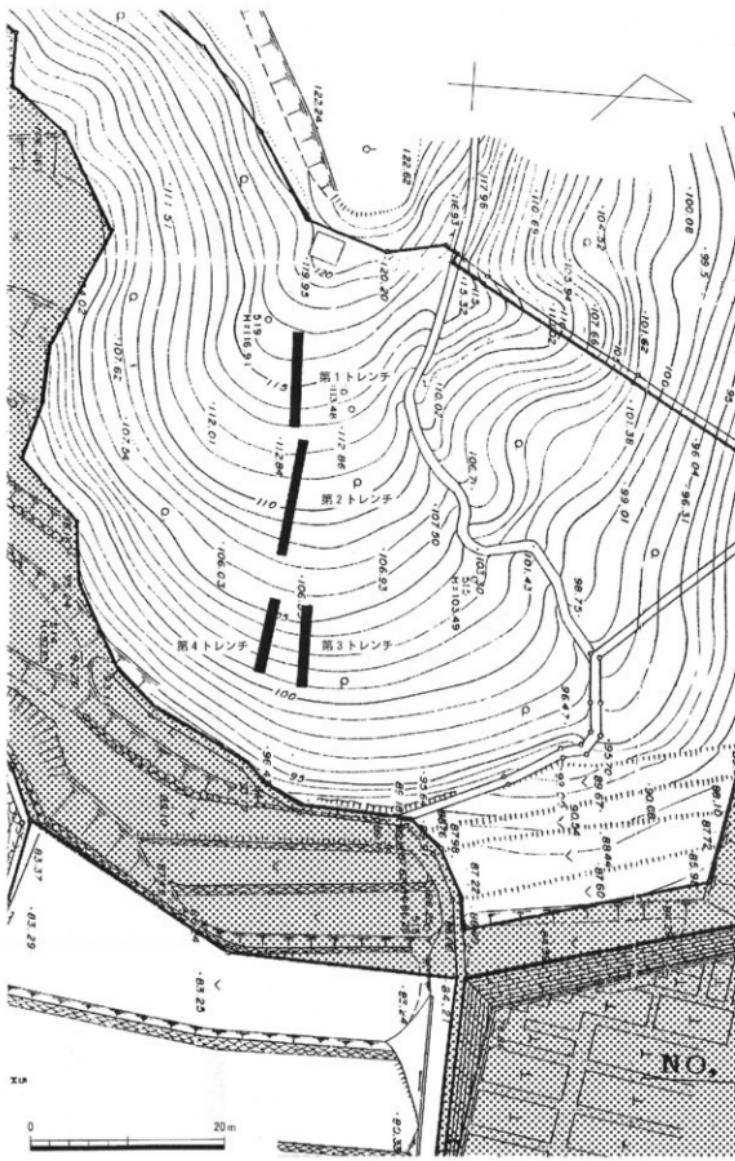


図4 トレンチ位置図

トレンチの長さは10.8mで、深さは最も深い部分で約50cmまで掘り下げました。樹木を取り除いた際に掘り込まれた穴が数箇所で確認されましたが、これは最近の開墾に伴うものと考えられます。

第2トレンチは、第1トレンチの下に当たります。トレンチの長さは10.8m、最も深い部分で約60cmまで掘り下げましたが、やはり遺跡は確認できていません。

第3トレンチは、第2トレンチの下、やや北側に当たります。トレンチの長さは9.6m、最も深い部分で約90cmまで掘り下げました。この位置は、分布調査の際に巨石が露出していたため、古墳があるかもしれないと考えられていた地点です。そのため、石の周辺を中心にはじめに掘り下げていきましたが、それらの石が上から流れて溜った土の中にあることから、いずれも上の方から転落してきたものであることが確認できました。

第4トレンチは、これらの石が古墳に使用されたものでないことを確認するため、やはり石が露出していた第3トレンチの南側に、第3トレンチと平行に掘ることにしました。長さ8.8m、最も深い部分で約80cmまで掘り下げました。ここでみられた石は、転落してきたものと、もともと山の基盤となっている土の中にある自然の石があります。このような基盤の土を地山（じやま）と呼んでいます。今回の調査では花崗岩（かこうがん）の風化した土が地山となっていますが、部分的に花崗岩の岩盤の露出がみられます。

以上のように、今回の調査では、遺構・遺物は全く確認できませんでした。



写真3 第1トレンチ



写真4 第2トレンチ



写真5 第3トレンチ



写真6 第4トレンチ

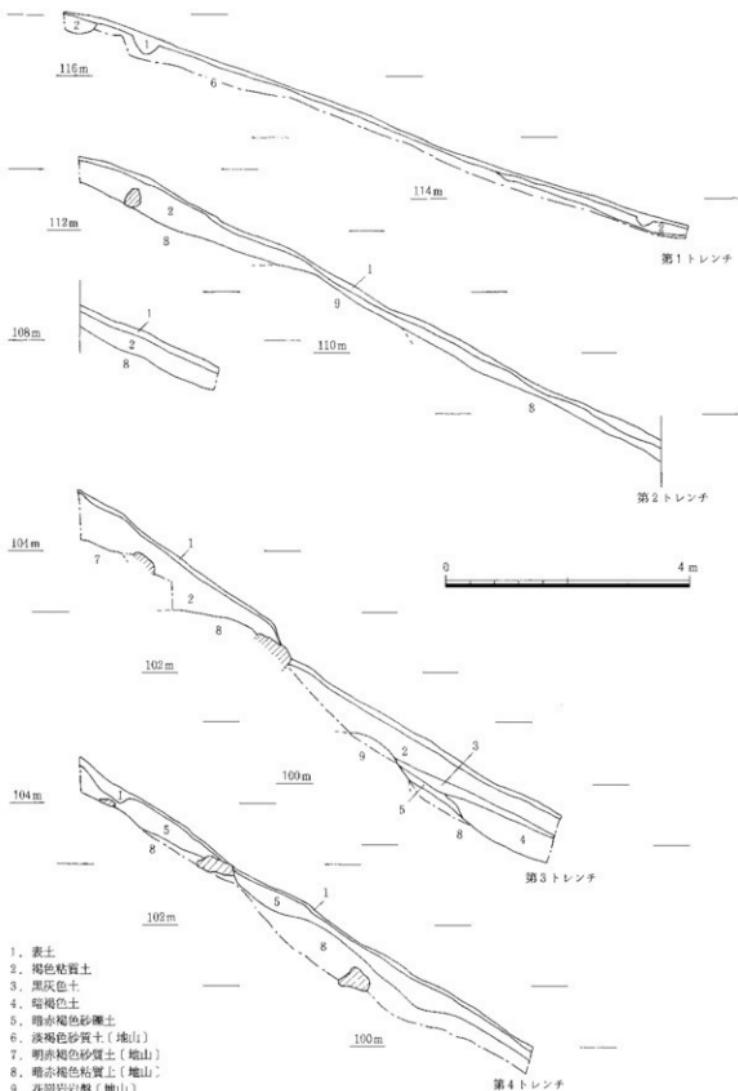


図5 トレンチ土層断面図

95-7次調査

- ・調査対象地 柏原市大字安堂526-2
- ・調査期日 1995年12月4日～12月11日
- ・対象面積 1600m²

この調査は関西電力株式会社の依頼と費用負担による、鉄塔建替工事に伴う事前の発掘調査です。現況は山林です。

平尾山古墳群には6世紀から7世紀にかけて1500基以上もの古墳が造られたことが知られています。尾根筋の地形を選んでいるものが多いことから、今回の対象地は特に注意され、鉄塔の脚部、工事用機器設置箇所すべてについて調査することとし、図6のように4箇所の調査区(59.6m²)を設けました。標高は104.0m～107.8mになります。



写真7 対象地近景（西から）

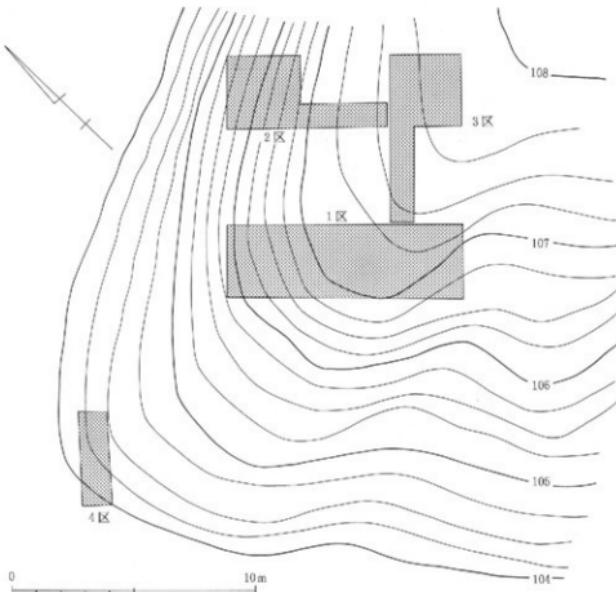


図6 調査区位置図

遺構として、1区の東で、また3区では南の1区とつながるところで、地表から30~50cm掘り下がったところで南北方向の溝がみつかりました。幅120cm、深さ50~70cm、断面はV字状をしています。底で比べると南に向けて90cm低くなっています。この溝の平面形は調査区内ではS字状になっています。普通、古墳の周りにめぐらされる溝は円形や方形といった決まった形をしているので、この溝については直接的には古墳の溝とはならないと思われます。但し、古墳へつながる道である墓道（はどう）となる可能性は考えられます。

1区の中程から西にかけてと2区、3区の北半分では表土を取り除くとすぐに花崗岩（かこうがん）質の地山が表されました。4区では木を取り除いた穴の他、遺構、遺物ともみつかりませんでした。

遺物として、溝を埋める土の中から須恵器や土師器の破片がみつかりました。そのうち図として描くこと出来るものは図8の3点で



写真8 調査1区東半（東から）



写真9 調査1区東半（南から）

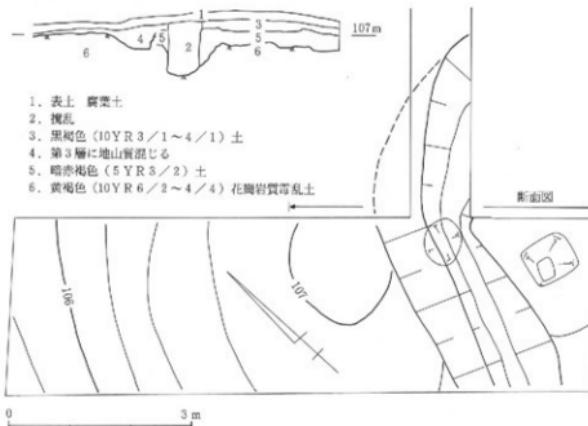


図7 1区平面図、北壁断面図（部分）

した。1、2は須恵器、3は土師器の小型高坏の脚部です。これらは6世紀の後半に作られたものとみられます。

この調査では、当初予想された古墳の埋葬施設や埴丘、それに関係するものはみつかりませんでした。各調査区では現在の鉄塔建設の時のものと思われる工事の跡等はありましたが、地形測量や地山の状態からみて、古墳が造られたり、また後に古墳が潰されるなどして大きく地形が変えられたと思えるような形跡はありませんでした。よって今回の工事の範囲内に古墳はなかったのではないかと考えています。

今回の対象地から下方に続く西向きの斜面では古墳だけでなく、お祭りに使われたと思われる小型の高坏や土馬（とば 馬の形を模した土製品）が過去の調査で多くみつかっています¹⁾。同じ尾根筋、斜面地にあり、古墳が造られるのに十分適した地形をしているこの調査地に古墳がなく、そうした遺物もみつからなかったのはどうしてでしょうか。遺構や遺物がなかったことも、大きな問題となることがあります。

注1) 柏原市教育委員会 『太平寺古墳群』

1983



写真10 調査2区西半 (西から)



写真11 調査3区南半 (北から)

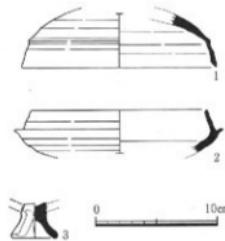


図8 出土遺物

第2章 太平寺遺跡



図9 調査対象地位置図 (S = 1/5000)

95-1次調査

- ・調査対象地 柏原市太平寺2-149
- ・調査期日 1995年5月8日～6月5日
- ・対象面積 764.02m²

この調査は丸紅株式会社（代表取締役 橋本守）の依頼と費用負担による、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査です。

1990年8月10日、地下に建物跡や遺物包含層（土器類を含む層）の有無を確認する試掘調査を実施しました。その結果、現在の地表から220～350cmのところに奈良時代から中世にかけての包含層を確認しました。計画される建物により影響があると判断されたことから、より広い範囲での調査が必要となり、その方法や日程等について協議を重ね、この調査を実施することとなりました。



写真12 調査区近景（東から）

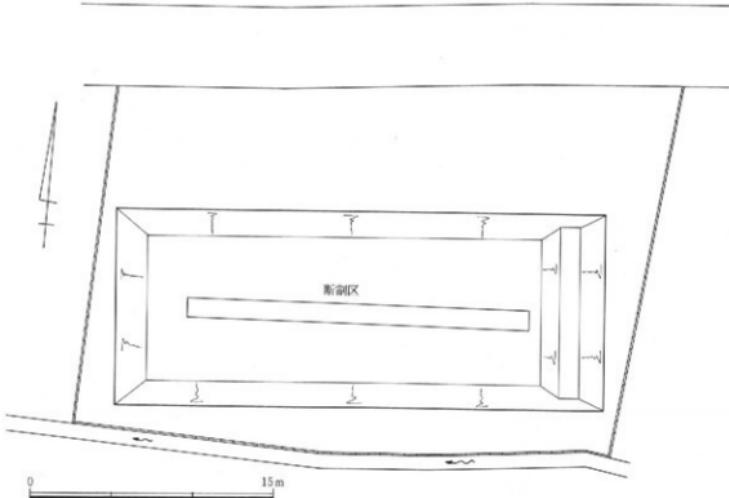


図10 調査区位置図

まず重機により図11に示す第2層までの盛土や砂を取り除き、以下を人力により掘削しました。現地表下200cmまでは全面的に、以下は幅120cmの溝掘りによって現地表下300cmまで状況を確認しました。

第1層は以前にこの土地に建っていた建物の基礎や整地時の盛土で、コンクリート製の杭や基礎などが多く入っていました。それらを埋め込むための大きく深い穴もたくさんあり、特に調査区東半では、以下の各時代の層の状態は決していいものではありません。

第2層は大和川の洪水により押し流されて来た砂と思われます。周辺の他の調査地の状況等から、1704年の大和川の付け替え以前の洪水によってもたらされたものと思われます。砂層の下からは歓幅125cm、高さ25cmを測る近世の畠が現れました。丁寧に砂を取り除くと作物が倒れた状態でみつかったところもあります(写真17)。倒れている方向から南西あるいは南々西方向から砂が流れてきたことがわかります。この作物は農家の方にお聞きすると「クワ」だろうとのことです。「クワ」で思い当たるのは「蚕業(さんぎょう かいこをかって、そのまゆから絹糸をつくる)」ですが、このあたりで江戸時代の初め頃に蚕業が行われていたという記録がみられないの

で、栽培の目的はよくわかりません。



写真13 作業風景



写真14 畠検出面 (西北から)



写真15 畠 (北から)

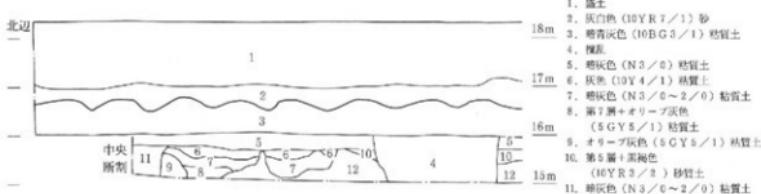


図11 調査区北壁断面図 (部分、合成)

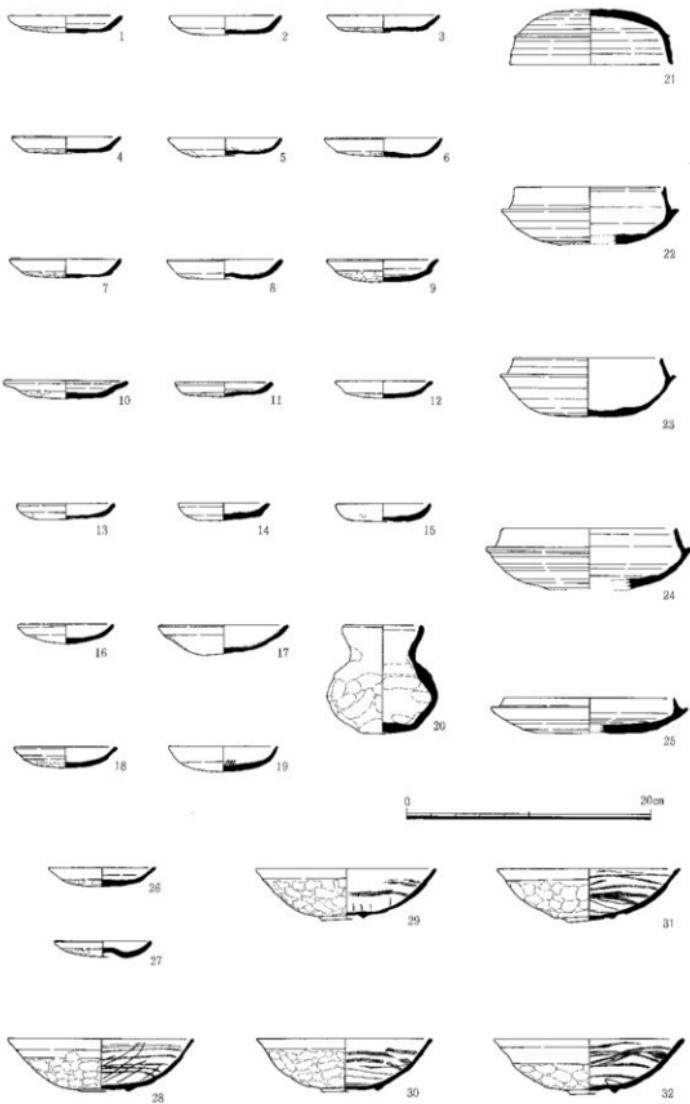


图12 出土遗物

畠の土を掘削した後は、溝のように細長い調査区で下層の状況を確認することとしました。湧水が著しかったこともあり、遺構の明確な検出は出来ませんでしたが、断面を観察すると土坑があることがわかりました。

その調査区の西端で井戸がみつかりました。井筒は直径30~40cm、高さ25cm前後の曲物を4点使用しています。掘形は断面の状況から直径90cm、深さ145cmを測ります。この井戸は底からみつかった土器類からみて、鎌倉時代に使用されていたものと思われます。覆い屋の存在を確認するため井戸の周辺を調べましたが、柱穴などはみつかりませんでした。

遺物として須恵器、土師器等の土器類がコンテナに換算して10箱分みつかりました。図12の1~18は土師器の皿。19は瓦器の皿。20は土師器の小型の壺。21~25は須恵器の蓋と杯。これらは第3層から下の遺物包含層から出土しました。26、27は土師器の皿、28~32は瓦器の壺で、これらは井戸から出てきたものです。

調査地の北から東北方向にかけて約400mの一帯では必ずと言っていいほど大和川の氾濫により流されてきた砂の層があり、北へ行くほど厚く、深くなっていくことがここ数年の各所での調査でわかつてきました。今では平坦地になってるこの一帯も、近世以前には高低差のある複雑な地形をし、たびたび大和川の悪い面の影響を受けていたようです。そうした厳しい自然環境の土地でも、生活の糧としていた遺構である畠がみつかったことは一帯の生活史、産業史を考えていく上で、大きな成果となりました。

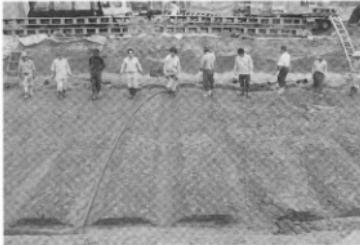


写真16 畠（南から）



写真17 植物遺体



写真18 井戸（西から）



写真19 井戸（東から）

第3章 安堂遺跡



図13 調査対象地位置図 ($S = 1/5000$)

95-1次調査

- ・調査対象地 柏原市安室町218、219、220、221-1の各一部、222-1
- ・調査期日 1995年4月10日～1995年8月11日
- ・対象面積 1328.10m²

この調査は安尾三治氏の依頼と費用負担による、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査です。

1994年3月9日にまず試掘調査を実施しました。対象地のほぼ中央付近に長さ13m、幅1.2mの南北方向の調査区を設け掘削したところ、現在の地表から深さ100cmまでに遺物包含層や柱跡等がみつかりました。そして計画される建物により影響があると判断されたことから、より広い範囲での調査が必要となり、その方法や日程等について協議を重ね、建物本体部分（以下、1区）と浄化槽部分（以下、2区）の合計463m²を対象としてこ

の調査を実施しました。1区については掘り上げた上の仮置場所の都合により、調査区を4度に分けて掘削しました。

まず重機により現地表下70～100cmの地山のすぐ上までを除去し、その後、出てきた面を薄く削り取って遺構のあるなしを確認する精査作業をしました。そうしたところ奈良時代、中世の柱跡や古墳時代から中世に至る土器類を多く含む溝状の遺構がみつかりました。



写真20 対象地近景（西から）

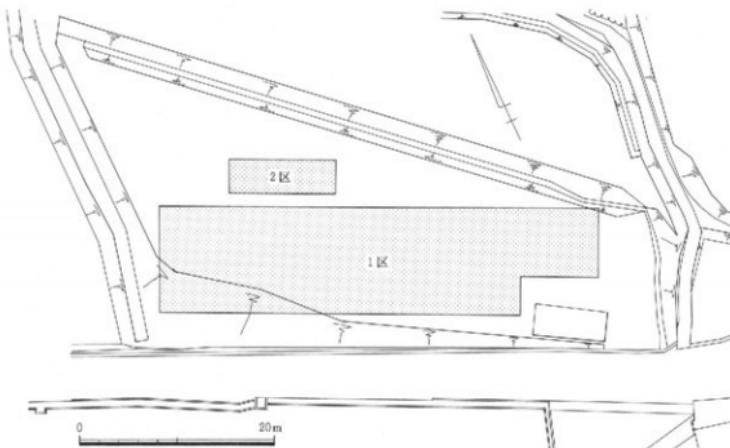


図14 調査区位置図

遺構としてたくさんの柱跡、自然流路となる溝、井戸がみつかりました。柱跡には直径20cm程度の円形のものと、一辺70cm程度の幅が丸い四角形のものとがあります。残っている深さは円形のもので10~30cm、四角形のもので20~70cmです。図に網点で示したように、隣り合う柱との間隔や、並んでいる方向が同じようなものが集中しているところがあります。間隔が180~220cm前後のこれらの柱穴で東西、南北とも2~3間（間=けん、柱と柱の間がいくつあるかという数え方で、1間=6尺=約180cmという数値を表すものではありません）程度の建物が成り立っていたものと思われます。柱跡や溜まった土からみつかる土器からみて、円形のものは中世、四角形のものは奈良時代のものと思われます。またみつかった柱跡の深さではその建物は雨風にとうてい耐えられるものではありません。本来はもっと深く掘られていたようですので、後の時代

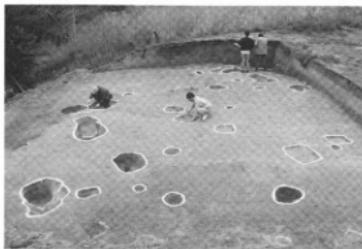


写真21 調査1区西端 (東から)



写真22 調査1区西半 (東から)

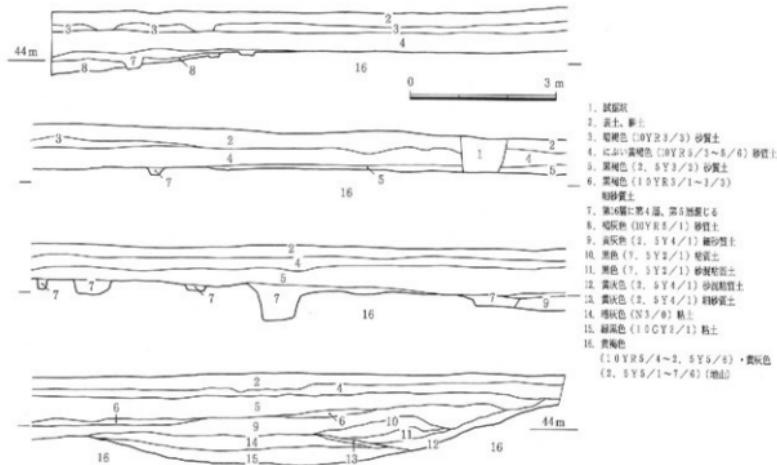


図15 1区北壁土層断面図



図16 平面図

にこの調査地が何度も削られるなどして、土地の様子が変わっていることがわかります。

自然流路かと思われる溝状の遺構は1区の東端でみつかりました。幅400cm、深さ40cmを測ります。それを埋める土の中からみつかる土器や上の層の様子から考えて、奈良時代には既に埋められていたようです。

井戸は調査区の東半中程、溝の西側の縁部分でみつかりました。井筒は直径35~50cm、高さ25cm前後の曲物を4点使用しています。直径の小さいものから順に下の方から積んでいます。掘形は断面の状況から直径90cm、深さ70cm以上を測ります。上の方は掘削時には既になくなっています。本來の井戸の大きさや井筒の段数はわかりません。この井戸はみつかった土器の破片からみて、鎌倉時代に使用されていたものと思われます。先の溝は埋められても水の流れを持っており、そこに目をつけた人が井戸を掘り、円形柱跡の建物の人开发利用に供したのでしょうか。

遺物として須恵器、土師器等の土器類がコンテナに換算して18箱分みつかりました。日常使われる土器が多い中で、特に目を引くものが数点ありました。図18の10は墨書き土器(ぼくしょどき)です。須恵器杯の底の表面に字が墨書きされています。「坂本」と読めるでしょうか。「坂」の上には字は書かれていなかったようですが、「本」の下には継ぎがあるかもしれません。使っていた人か使われていた場所の名前でしょう。11は須恵器の壺。内面いっぱいに漆がついており、容器として使われていたようです。また表面には六角形に編まれた籠状のものの跡が残っています。同じようなものが北に1.2kmにある大県南遺跡でもみつかっています¹³⁾。12は鶴の頭



写真23 調査1区東半建物（西から）



写真24 調査1区東半建物（南から）



写真25 調査1区東端北壁（南から）



写真26 調査2区（東から）

のかたちをした埴輪。1~9、12は第4層の遺物包含層から、10、11は溝を埋める土からみつかりました。

調査地の南一帯には「河内六寺」の一つである飛鳥時代に建てられた鳥坂寺や、それに関係する集落であったと考えられている高井田遺跡があります。今回の調査地でもそれらと地域的に続いてくる集落の存在が想像されました。現在の地形がそうした集落の立地に適した平坦面を形作っているからです。しかし実際に掘ってみるとそのような資料は多くはみつかりませんでした。一方、このところ柏原市内では山麓部でよくみつかっている、中世の遺構や遺物がここにもありました。今まで注目されることの少なかった時代の資料ですが、飛鳥、奈良時代に統いて中世にも豊かな生活の場が広い範囲にあったことはこれからも見過ごすことはできません。

注1) 柏原市教育委員会 『柏原市遺跡群発掘調査概報 1994年度』 1995

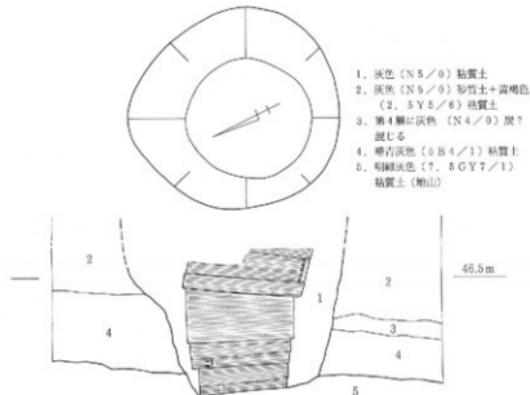


図17 井戸 (S = 1/20)

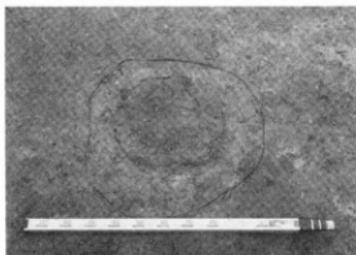


写真27 井戸検出時（東から）



写真28 井戸断面（西から）

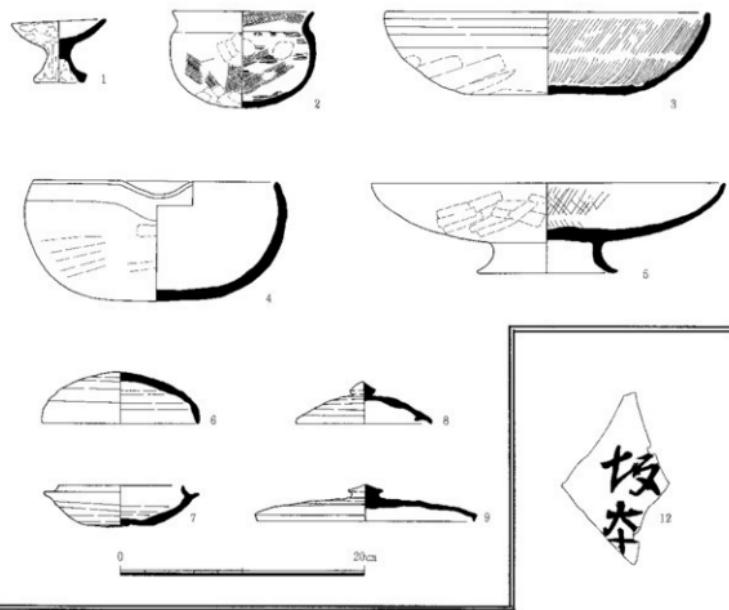


図18 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かしわらしいせきぐんはっくつちょうさがいほう							
書名	柏原市遺跡群発掘調査概報 1995年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名	柏原市文化財概報							
シリーズ番号	1995-IV							
編著者名	安村俊史 石田成年							
編集機関	柏原市教育委員会							
所在地	〒582 大阪府柏原市安堂町1-43 TEL0729-72-1501 (内5133・5134)							
発行年月日	1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積	
	市町村	遺跡番号					調査原因	
ひらおやま 平尾山古墳群	かりんどうばた 雁多尾畠	27221	KRK95-2	34度 08秒	135度 04秒	19950516～ 19950529	40m ² 草地拡張	
	あんどう 大字安堂			35分	37分	60m ²		
たいへいじ 太平寺	たいへいじ 太平寺2丁目	27221	ADK95-7	34度 35秒	135度 20秒	19951204～ 19951211	60m ² 鉄塔建設	
	あんどう 安堂			34分 44秒	38分 01秒	19950605		
あんどう 安堂	あんどうちょう 安堂町	27221	TH95-1	34度 26秒	135度 07秒	19950410～ 19950811	345m ² 501m ² 共同住宅建設	
				34分	38分	19950811		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平尾山古墳群	古墳	古墳	溝	須恵器、土師器				
太平寺	集落	古墳～近世	井戸、畠	須恵器、土師器、瓦、瓦器				
安堂	集落	古墳～中世	ピット、井戸	須恵器、土師器、埴輪、瓦器				

柏原市遺跡群発掘調査概報

1995年度

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 (0729) 72-1501
発行年月日 1996年3月31日
印 刷 東洋紙業高速印刷㈱

